

## <エッセイ>

### SF 作家は未来の夢を見るか？

#### Do Science Fiction and Fantasy Writers Dream of the Future?

池澤春菜

Haruna Ikezawa

AI の台頭や気候変動、紛争や戦乱、大きな出来事が起きるとそれに付随した SF 作品が取り沙汰されることはままある。わたしも「未来を予言しているような SF 作品はありますか？」と聞かれることは多い。

SF と未来予知。

しばしばセットにして語られる言葉。

けれど SF 作家は予言者であるべきなのか。SF 作品は未来を予知しているのか。

どちらも、わたしの答えは NO だ。

予言は、予め言葉を置く、と書く。確かに SF には未来を描いた作品がたくさんある。その中のどれかは当たっているかもしれない。でも例えば、SNS の鍵をかけたアカウントで適当な予言を大量に呟いておいて、1 年後に外れているやつを消した上で鍵を外せば、あたかも未来予知をしたように見えるだろう。それと何が違うのだろう。どんな鉄砲も、数を打てばそれなりに当たりは出る。

予知になった時点で、その作品の評価は当たるか外れるか、二択になってしまう。SF 作品が、物語の持つ役割はそうではない。より多くの、より多様性に富んだ未来を見せることだ。当てに行ってしまうとは可能性は収束してしまう。大事なものは外れた未来の方、常にオルタナティブに、ありうるかもしれない未来を見せること。

一つの Future ではなく、無数の Futures。無数の可能性を提示することで、読者に未来に対する備えを考えて貰う。選びたい未来と、忌避すべき未来を思い描く。

作家の創造力、想像力は、実現可能な未来ではなく、いかに思い切りよく外れた未来を思い描けるか。こうなるかも、や、順当に考えると、ではなく、想像力のエンジン全開でぶっ飛ばした、誰も見たことのないビジョンを読ませること。

今を基準に考えるフォアキャスティングではなく、まずは未来に飛んでみるバックキャスティングの自由闊達さ。昨今、SF プロトタイピングに注目が集まっている理由はそこにある。

SF が持つ役割、力は、王道正道を外れていくことにあるように思う。

では、SF とは何か。これもまた良く聞かれる問い。

もちろんサイエンス・フィクションは一つの答え。けれど同時に、スペキュレイティヴ・フィクション（思弁小説、思考実験）でもあり、スーパー・ファンタジーでもあり、スコシ・フシギでもある。

サイエンスがカバーする範囲も広い。物理学や自然科学、社会科学、人文科学。哲学や芸術を除く、とあるが、こっちはフィクションの方でカバーしている。要するに、あらゆるものは SF と呼べる！（というのは SF ファンならではの牽強附会な悪いところだけだ）。

宇宙が舞台でなくとも、ロボットや宇宙人が出てこなくても、時間を遡らなくとも、SF なのだ。

わたしにとっての SF は、世界に何かしら IF を入れること。池に IF という小石を投げ込む。波紋が広がる。その波紋が見えなかった池の縁や、池に住む生き物たち、水の流れを明らかにする。波紋の行方を丁寧に追うこと、それが世界にもたらす影響を隅々まで考えること、それが SF 作家としての責任だと考える。

先日対談した韓国の SF 作家キム・チョヨプさんは、SF は実験室だと仰っていた。実験室の中では、危険な思想や技術も取り扱うことができる。

では、実験室の外にそれらが出たときになにが起きるのか。物語には力がある。物語の持つ力は時に現実の世界を変えうる。

ニール・スティーブンスンが 1992 年に書いた『スノウ・クラッシュ』。この中に出てきた仮想空間メタバースは、30 年の時を経て実現した。ザッカーバーグはこの小説の愛読者だった。ウィリアム・ギブソンの傑作『ニューロマンサー』で描かれたサイバースペース。ロボットという言葉が生まれたのはチェコの作家カレル・チャペック『R.U.R』、その語源は強制労働者。アシモフの名作『サリーは我が恋人』には、意志を持った完全自動制御の車が出てくる。『銀河ヒッチハイク・ガイド』のバベルフィッシュは万能通訳を可能にする魚、AI 翻訳ツールは今では日常的だ。

まるで、未来を予知したかのような、数々の作品たち。しかし、これらの作品の真価は、未来を言い当てたことにあるのではない。その本質は、読者の想像力を解き放ち、新しい可能性への扉を開いたことにある。『スノウ・クラッシュ』が素晴らしいのは、メタバースという概念を予言したからではなく、その世界観が読者の心に鮮烈な印象を残し、創造への意欲を掻き立てたからだ。『ニューロマンサー』が偉大なのは、現代のインターネット社会を予見したからではなく、テクノロジーと人間の関係性について深い洞察を示したからである。

重要なのは、これらの作品が示した未来が「実現した」ことではなく、その物語が描いた可能性の広がりそのものなのだ。

予言者としての SF 作家ではなく、可能性の開拓者としての SF 作家。そこにこそ、このジャンルの真髓がある。

未来は一つではない。

それぞれの作品が示す無数の可能性こそが、わたしたちの明日への想像力を育み、より豊かな未来への道標となる。